

『新訳 北と南』を監訳して

副会長 松本三枝子
(愛知県立大学名誉教授)

年の瀬のあわただしい12月18日に、『新訳 北と南』が我が家に届いた。すでに献本先からは、早々に礼状がメールで届き始めていた。会員の皆様をご存じのように、『*North and South*』は、朝日千尺先生訳が日本ギaskell協会から2004年に出版されている。今回の新訳プロジェクトは、本協会が2023年5月14日から2025年5月11日までの2年間に隔月で開催した研究会から誕生した。ヴィクトリア朝の長編小説である『*North and South*』に日本語訳が存在することにより、ギaskell研究はもちろんだが、ヴィクトリア朝研究にも幅広く貢献してきたことを、本協会の会員として、とても誇りに感じてきた。その一方で、20年という長い年月を経て、時代に適した日本語表現や日本語表記に更新する必要も痛感した。翻訳チームの総勢は22名で、私は監訳者として、後から加わったのだが、海外出張で欠席した1回を除く全ての研究会に出席し、各担当者の翻訳の苦労や日本語表現の推敲箇所などの具体的な議論に参加できた経験は、興味深くかつ有益であった。監訳者は、金山亮太、大田美和両先生と私の3名で、監訳期間は2024年4月から2025年3月までの1年間を予定した。

礼状をくれた友人によれば、環境問題の研究をしていた時に、『北と南』を参考にしたので、新訳が出たことは本当に助かるとのことだった。確かに、ギaskellの社会小説は、『メアリー・バートン』も『北と南』も、貧困や階級格差について焦点化しているので、労働者の衣食住の問題を詳述している。公的機関が国勢調査などにより、国民全体あるいは社会全体の状況を把握して政策を進めようとしていた一方で、小説家はむしろ個人に焦点を絞り、国民一人一人が直面する問題を明らかにすることにより、その苦悩と辛酸を語ろうとした。そのため、ギaskellは、労働者が何を食べ、いかに食べられない状況か、いかに劣悪な環境で生活しているのかなどをドキュメンタリーのように記述している。今回の新訳出版の目的の一つは、分かり易さの追求である。これまで以上に、幅広い読者の目に留まり、多様な研究の一助となってくれれば望外の喜びである。

そうではあるのだが、監訳の道のりは、当初予想していたよりもはるかに難事業であった。何しろ大所帯の22名体制であるので、一貫性を保つことは重要であるが、簡単ではなかった。まずは固有名詞の表記統一を図るために、研究社刊リーダーズ英和辞典などに依拠した表記に統一した。使い慣れた「ヘイル」を「ヘール」に、「ヘンリ」を「ヘンリー」にした。本文はもちろんだが、2巻通して52章の章題に登場する固有名詞を含めると、膨大な数になるので、各自がすぐに依拠できるリーダーズ英和辞典などの表記に統一することが求められた。マーガレットが母親を呼ぶときに、「ママ」と「お母さま」が訳文で混在していると指摘されたが、“mamma”と“mother”は英語原文でも混在している。ヘール氏にとってはオックスフォード大学時代の指導教員であった“Mr. Bell”は「ベルさん」でよいだろうが、マーガレットにとっては兄の名付け親なので敬意を込めて「ベルさま」とした。父娘が会話している時には二つの呼称が飛び交うことになる。監訳者の中で意見が分かれたのは、“Miss Hale”をどう訳すかであった。翻訳文学では、「ヘール嬢」であるが、会話の中で、面と向かっての呼称として適切なものか、悩ましいところである。21世紀の現代であれば、“Miss Hale”ではなく、“Margaret”と呼ぶと思うのだが、ヴィクトリア朝では“Miss Hale”である。会話の相手としては「ヘールさん」と訳す方が自然であるが、その場に父親が同席していると、だれを意味するのか判然としなくなる。今回の監訳は、分かり易さを目標としているので、結局翻訳文学における慣用的表現である「ヘール嬢」に落ち着いた。

それにしてもどの程度の分かり易さか、それが問題である。読者層としては学部学生を想定して、筑摩書房世界文学大系から光文社古典新訳文庫に向かったはずであるが、成果のほどはどうであったろうか。

『新訳 北と南』の監訳の仕事は、私にとっても大きな区切りとなる仕事となった。同時に、マーガレット・ヘールがなぜあれほどまでに、兄をかばって嘘をついたことに呻吟したのか、再び考えてみたくなった。それは2025年の京都賞にキャロル・ギリガンが選考されたことも刺激となっている。ギリガンが『もうひとつの声：男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』（*In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*）において言及しているのは、ジョージ・エリオットの『フロス河畔の水車場』とマーガレット・ドラブルの『滝』である。エリオットが、マギー・タリヴァーを解決不能のジレンマの中に置いて溺死させてしまった一方で、ギヤスケルは、兄のためとはいえ嘘をついたマーガレットの悔悛と篤信を認め最終的には救済している。結末は異なるが、この二人のヒロインの苦悩は、ギリガンが分析する次のような女性の声を確実に伝えているように考えられる。

成人期初期では、アイデンティティと親密性が人間関係の葛藤のなかに凝縮してみられ、このとき、自己と他者の関係がはっきり示されます。この関係が、男性と女性とではちがった経験となってあらわれるのですが、このことは人間の発達を描く文学の不変のテーマであり、またわたし[ギリガン]の研究の結論でもあります。思春期の経験の特徴づけるのは、アイデンティティと親交の分岐ですが、性のアイデンティティの形成がなされるこのとき、男性と女性では分離と愛着の力学が異なるため、男女の声はそれぞれがちがった真理の重要性について典型的な語り方をします。男性は自己を浮き彫りにし、自己に権力を与えるものとして分離の役割を語り、女性は人間社会を創りあげ維持する愛着、いま自分たちがかかわっている愛情について語ります。

(275)

ヴィクトリア朝の女性作家が描いている若きヒロインが直面するジレンマは、21世紀に生きる私たちが、人生においてあるいは日常生活で直面し苦悩するジレンマに通底しているのではないだろうか。時代を経て克服される社会問題は多いが、女性作家が前景化するヒロインのジレンマとその克服は、私たち読者の人生において今も変わらず導きの光となり得ると信じたい。『新訳 北と南』が、新たな読者を獲得し、彼らに寄り添うことができたら、難事業であった監訳の苦労が報われるというものである。会員の皆様のご意見及びご批評などを承ることができれば、幸甚です。

引用文献

キャロル・ギリガン. 『もうひとつの声：男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』 岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子共訳、川島書店、1986.

◆◆◆新刊紹介（2025年度版）◆◆◆（掲載情報は2026年3月15日までに報告されたものです。）

- ・ 桐山恵子（共著）『スポーツする英語文学』（金星堂、2,750円、2025年5月30日刊）
- ・ 日本ギヤスケル協会（訳）松本三枝子・金山亮太・大田美和（監訳）『新訳 北と南』（大阪教育図書、7,700円、2025年11月12日刊）
- ・ 杉村藍（著）『語りとヴィジュアルリティ—シャーロット・ブロンテの一人称小説を読む』（春風社、4,400円、2025年12月12日刊）

第37回大会レポート

日 時：2025年10月4日（土） 岩手県立大学（アイーナキャンパス）

13:00～13:05 開会の辞 日本ギヤスケル協会会長 閑田朋子（日本大学教授）

総合司会 矢次綾（松山大学教授）

13:05～13:35 研究発表 司会 木村晶子（早稲田大学名誉教授）

「“The Grey Woman”における階級・恐怖・暴力」

大前義幸（岩手県立大学准教授）

13:35～13:45 Break

- 13:45～15:25 シンポジウム「ギヤスケル作品にみるケア」
 司会・パネリスト 遠藤花子（日本赤十字看護大学准教授）
 パネリスト 星志乃（東京農業大学助教）
 パネリスト 木村正子（岐阜県立看護大学准教授）
- 15:25～15:35 Break
- 15:35～16:05 総会
- 16:05～17:05 講演 司会 鈴木美津子（東北大学名誉教授）
 「女だけの世界——『クランフォード』、『妻たちと娘たち』再訪」
 原英一（東北大学名誉教授）
- 17:05～17:10 閉会の辞 日本ギヤスケル協会副会長 松本三枝子（愛知県立大学名誉教授）

研究発表

「“The Grey Woman”における階級・恐怖・暴力」

エリザベス・ギヤスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-1865）の短編小説“The Grey Woman”（1861）は、伝統的なゴシック・ロマンスの語法を踏襲しつつ、家庭に潜む暴力や抑圧といった「現代的な恐怖」を描き出した作品である。本作における恐怖の根源は、超自然的存在ではなく、家庭という閉ざされた空間に潜む権力と暴力にあり、それを通して親子関係や階級の対立など、ヴィクトリア朝社会の諸問題が浮かび上がる。本発表では、主人公アンナが上流階級の出身でありながら、結婚によって暴力的な支配下に置かれる過程に注目し、女性の身体が「階級」と「暴力」の交錯点としてどのように描かれているかを考察した。また、アンナが夫トゥレルから逃避する行為を、階級的転倒と暴力からの解放を象徴するものとして読み解き、ゴシック・フェミニズム的構造の中で階級意識と家庭内暴力の関係がいかに批判的に提示されているかを明らかにした。（大前義幸）

シンポジウム

「ギヤスケル作品にみるケア」

本シンポジウムでは、日常レベル的なケアから医療的行為を含むケアに至るまで、幅広い意味を持つ「ケア」に焦点を当てた。ヴィクトリア朝は、医療を受けられない人が多かった一方で、外科技術の進歩や薬品の開発、ウィルスの発見など、病気に対する概念に変化がもたらされた時代でもある。ギヤスケルが小説を通して描いているケアを分析し、医療、障害者と在宅介護、セルフケアのそれぞれの視点から、ギヤスケルがどのようにケアを見つめていたのかを考察した。

『メアリ・バートン』にみる医療的ケア

ギヤスケルの作品では、長編小説が執筆されるごとに、医者に対する見方や病気との戦い方に変化が見られ、同時に医療技術の進歩も垣間見られる。第一作目である『メアリ・バートン』では、登場人物が次々と病で亡くなり、医療は壊滅的な状態であるが、最後の作品である『妻たちと娘たち』で描かれている医療には、伝染病との戦いの中で新薬が開発されるなど、明るい兆しがみられる。このことを踏まえ、本発表では、過去にとらわれて進歩の見られない状況と、19世紀末に起こる医療の革命的時代の挟間にある『メアリ・バートン』に焦点を当て、初期ギヤスケル作品で描かれている医療の実態を医学史的側面から考察した。悲劇的結末を迎えなければならなかった人々の叫びに対し、医者は何も応えることができなかったが、薬剤師は丁寧に対応していたこと、また労働者が悩まされていた病気を探ることで、当時の人々がどのように医療を認識していたかについて論じた。（遠藤花子）

ケアが生む連帯と変容——『ラドロー卿の奥様』におけるケアの流動性——

『ラドロー卿の奥様』におけるケアの実践は、社会的立場の異なる人々を結びつける触媒となっている。本発表では、障害を持つ3人の登場人物を取り巻くケアが共同体の社会変革に与える影響と、マーガレット・ドースンの語りの技法を中心に考察した。労働者階級のハリー・グREGスに教育や医療的支援を施す大人たちの存在は、適切なケアの担い手が家族に限らないことを示している。キャプテン・ジェイムズによる非国教徒のブルック氏との協働によって実現した農地改革は、ハンベリーの人々の交友関係の拡大につながった。こうした連帯は、伝統的な価値観を重んじるラドロー夫人にも影響を与え、彼女を異なる階級や宗派の人々とも交流する人物へと変容させた。さらに、これらの出来事を語るマー

ガレットは、自ら可能な範囲でケアを実践するためにハンベリーを離れる選択をする。その能動的決断は、ケアされる立場に安住しない障害者像を提示していると言えるだろう。本作の障害者たちは、ケアの受け手であるのみならず、他者へのケアを多様な形で実践している者、もしくは将来的に実践する者として描かれており、ケアによる連帯やケアの担い手の可塑性を示しているのである。（星志乃）

ギヤスケル作品に見る自己の拡大の表象——自己の救済から他者の救済へ

本発表ではギヤスケル作品におけるヒロインの病後の回復期ケアに注目し、ケアのあり方が患者の後の人生指針に影響を与えることを検証した。フロレンス・ナイチンゲールは回復期患者に大きな影響を及ぼすのは看護人の言葉や行動であり、看護人には、患者が自己の内面に拘泥するのではなく、意識のベクトルを前向き・上向きに転換するように促すという重要な役割があると指摘する。この考えを適用すると、ギヤスケルの初期作品「ペン・モーファの泉」と後期の作品『従妹フィリス』では、看護人（親）が与えるシーズの視点と患者（娘）の求めるニーズの視点とのミスマッチが、ヒロインの回復遅延のみならず、両者の関係悪化の原因となっていることは明白である。そのゆえヒロインには親の保護から自立し、自身でニーズの充足をはかり、自己認識と自己確立のプロセスを通してそれを実行するプロットが必要となる。結果としてこれはヴィクトリア朝社会の慣習である女性の自己犠牲重視のスタイルを脱し、社会における自己（女性）の領域の拡大への可能性を示唆することになるが、ひいては21世紀の看護の現状とわれわれの自己拡大欲求の萌芽ともなっている点は興味深い。（木村正子）

講演

「女だけの世界——『克蘭フォード』、『妻たちと娘たち』再訪」

高校生のとき『女の町CRANFORD』（邦訳1947年）に出会って以来、私にとって『克蘭フォード』は、思い出深い小説です。半世紀後、大学教員生活最後の2018年、東京女子大学の授業で取り上げたとき、注目したのはファッションへの言及でした。ファッションは、『妻たちと娘たち』のシンシアの場合のように、女性たちの人生を左右します。モリーが編み物(work)をする場面では、編み物という「女だけの世界」が「歴史」を紡ぎ出していました。ディケンズの歴史小説『二都物語』（1859）では、フランス革命時に断頭台の前で編み物をする女性たち(tricoteuse)が、強烈な印象を与えるのですが、ギヤスケルの小説は無名の人々の歴史を描く歴史小説なのです。マクロの「歴史」は、イギリスの田舎町の人々のミクロの「歴史」にも容赦なく侵入してきます。鉄道網の急速な発展がその表れであり、『克蘭フォード』でのピーターのインド滞在と『妻たちと娘たち』でのロジャーのアフリカ周航の背景には、大英帝国の拡大があります。（原英一）

大会レポート

日本ギヤスケル協会第37回大会は、岩手県立大学アイーナキャンパスとZoomでのハイブリッド開催となった。大会は矢次綾氏を総合司会に、閑田朋子会長の開会の辞で始まった。今大会の参加者数は対面27名、オンライン10名であった。研究発表は木村晶子氏の司会による、大前義幸氏の「“The Grey Woman”における階級・恐怖・暴力」で、ギヤスケルが伝統的なゴシック・ロマンスを下敷きにしながら、結婚や家庭を女性の身体的、精神的な苦痛の源として描いている点を丁寧に考察された。シンポジウムは「ギヤスケル作品にみるケア」と題するもので、ヴィクトリア朝社会における医療、障害者と在宅介護、セルフケアを多角的に論じるものであった。司会も務めた遠藤花子氏は『メアリ・バートン』にみる医療的ケアで、作中で医療従事者たちが施したケアに注目し、まともな医療がない当時の実態をデータや事例など医療に関する背景を踏まえながら考察した。続いて星志乃氏は「ケアが生む連帯と変容——『ラドロー卿の奥様』におけるケアの流動性——」で、登場人物たちが身分や立場を超えて互いをケアしあい、それによって蜘蛛の巣状に人々がつながり合う様子を読み解いた。木村正子氏の「ギヤスケル作品に見る自己の拡大の表象——自己の救済から他者の救済へ」では、ギヤスケル作品で精神的なケアを必要とする人の救済には、必ずしも自己犠牲が伴うのではなく自己実現に至ることが指摘された。ギヤスケル作品を医学的資料として検証する有用性と新たな研究の方向性とが示された刺激的な内容であった。総会後は鈴木美津子氏の司会のもと、原英一氏の特別講演「女だけの世界——『克蘭フォード』、『妻たちと娘たち』再訪」が行われた。女性だらけの作品における食事、ファッション、手仕事などに注目し、作中に登場する日常の細部を画像と共に分析しながら、彼女たちの日常に侵入する鉄道やアフリカなどの「歴史」にも目配せを欠かさない、俯瞰的できめ細やかな内容であった。大会は

松本三枝子副会長の閉会の辞とともに締めくくられた。懇親会には21名が参加し、「ももどり駅前食堂」で舌鼓をうった。岩手県での開催は初めてで、街並み、雰囲気、食事の全てが新鮮で心地よいものでした。開催にあたり会場準備にご尽力くださった大前先生、大会運営に携わってくださった先生方、ご発表の先生方、ありがとうございました。（濱奈々恵）

2025年度役員会報告

日時：2025年9月28日（日）13:00～15:45（オンライン・Zoom）、2025年4月8日～12日、6月17日～7月4日、10月1日～2日、20日～24日、10月30日～11月6日、2026年2月9日～15日、3月7日～13日、2026年3月28日～4月7日（メール稟議）

- ① 現在の会員数は67名。
- ② 第37回大会は、2025年10月4日（土）に岩手県立大学（アイーナキャンパス）にてハイブリッド形式で開催。同大学より大会補助金が支給される予定。2026年度は名城大学、2027年度は立正大学（19世紀イギリス文学合同研究会との同日開催）で開催予定。
- ③ 『ニューズレター』第37号が2025年5月に発行された。
- ④ 『ギヤスケル論集』第35号が発行された。大会講演に基づく論文1本、投稿論文2本、書評2編であり、奨励賞該当はなかった。また、投稿規程については、字数制限を明確化し、「16枚以内（英文要約を含む）」とする改定方針が承認された。
- ⑤ 新訳『北と南』は、大阪教育図書から2025年11月に刊行。
- ⑥ 19世紀イギリス文学合同研究会は、2025年12月6日（土）に西南学院大学で開催。ギヤスケル協会からの研究発表者は濱奈々恵先生、シンポジウム登壇者は江澤美月先生。
- ⑦ 2024年度会計報告および2025年度予算案が承認された。
- ⑧ 第20期役員体制が承認された。新役員は以下の通り（敬称略）。会長：閑田朋子、副会長：松本三枝子、事務局長：遠藤花子、幹事：芦澤久江、足立万寿子、伊藤正範、大野龍浩、金山亮太、瀧川宏樹、原英一、松岡光治、村上幸太郎、矢嶋瑠莉、矢次綾、会計監査：濱奈々恵、松浦愛子
- ⑨ 創立40周年（2028年）記念事業として、記念論集刊行の検討を目的として、編集委員会が設立された。出版社は彩流社を予定。編集委員・査読委員は以下の通り（敬称略）。編集長：大野龍浩、編集委員：原英一、閑田朋子、村上幸太郎、査読委員長：大野龍浩、査読委員：足立万寿子、大田美和、金子幸男、閑田朋子、木村晶子、鈴木美津子、玉井史絵、原英一、松本三枝子

総会報告

日時：2025年10月4日（土）

場所：岩手県立大学（アイーナ・キャンパス）・オンライン併用

- ① 2024年度会計報告および2025年度予算案が承認された。
- ② 『ギヤスケル論集』投稿規程について、日本語原稿は英文要約を含め16ページ以内とする方針が承認された。
- ③ 第20期役員体制が承認された。新役員は以下の通り（敬称略）。会長：閑田朋子、副会長：松本三枝子、事務局長：遠藤花子、幹事：芦澤久江、足立万寿子、伊藤正範、大野龍浩、金山亮太、瀧川宏樹、原英一、松岡光治、村上幸太郎、矢嶋瑠莉、矢次綾、会計監査：濱奈々恵、松浦愛子

奨励賞報告

日時：2025年10月4日（土）

場所：岩手県立大学（アイーナ・キャンパス）・オンライン併用

- ① 今年度は奨励賞に該当する応募はなかった。

事務局報告（2025年度）

2024年度（2024.4.1-2025.3.31）日本ギヤスケル協会会計報告

2024年度一般会計予算

収入		支出	
前年度繰越金	1,332,668	通信費	50,000
年会費（含 英国）	399,000	大会費	150,000
大会補助金(日本大学文理学部)	50,000	事務費	20,000
		印刷費	180,000
		英国協会費	66,000
		(小計)	466,000
		次年度繰越金	1,315,668
合計	1,781,668	合計	1,781,668

2024年度一般会計決算

収入		支出	
	内訳		
年会費	333,000 325,000 (2024年度一般) 8,000 (2024年度学生)	通信費	38,892
懇親会費	51,000 3,000 ×17名	事務費	2,779
補助金	50,000 日本大学文理学部より	印刷費	130,691
補正収入	6,153	大会費*	120,071
(小計)	440,153	(小計)	292,433
英国協会	68,000 64,000 (2024年度一般) 4,000 (2024年度学生)	英国協会費	68,000
(小計)	68,000	(小計)	68,000
前年度繰越金	1,332,668	次年度繰越金	1,480,388
合計	1,840,821	合計	1,840,821

*支出の大会費「120,071円」の内訳

懇親会費 65,400円 飲料・茶菓子代 3,484円 紙コップ・紙皿 440円

文具・事務用品 2,057円 郵送代 1,140円 学生アルバイト代 (17,000円×2名)

施設利用料(振込料込み) 13,550円

上記の通り相違ありません。

日本ギヤスケル協会2024年度事務局長 早川友里子

日本ギヤスケル協会2024年度会計監査 遠藤花子

日本ギヤスケル協会2024年度会計監査 村上幸太郎

2025年度（2025年4月1日～2026年3月31日）日本ギヤスケル協会予算案

2025年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	1,480,388	通信費	40,000
年会費（含 英国協会）	391,000	印刷費	180,000
大会補助金	200,000	大会費	200,000
		事務費	20,000
		英国協会費	62,000
		19世紀イギリス文学合同	30,000
		研究会負担金	
		(小計)	532,000
		次年度繰越金	1,547,388
合計	2,071,388	合計	2,071,388

会費内訳

5,000 円× 65 人 = 325,000 円（一般）

2,000 円× 2 人 = 4,000 円（学生）

英国協会費

4,000 円× 15 人 = 60,000 円（一般）

2,000 円× 1 人 = 2,000 円（学生）

日本ギヤスケル協会第38回大会予告（仮プログラム）

2026年10月3日（土）13時00分より 於：名城大学 天白キャンパス

総合司会 西垣佐理（近畿大学教授）

13:00～13:05 開会の辞 日本ギヤスケル協会会長 閑田朋子（早稲田大学教授）

13:05～13:35 研究発表 司会 矢野奈々（北里大学専任講師）
「埋められるものと掘り起こされるもの——Provincial Fictionとして読む*A Dark Night's Work*」
村上幸太郎（宮崎公立大学准教授）

13:35～15:55 シンポジウム 「19世紀の旅する／彷徨う女性たち」（仮）
司会・パネリスト：志渡岡理恵（実践女子大学教授）
パネリスト：石井麻璃絵（東京工芸大学助教）
パネリスト：大久保譲（専修大学教授）
パネリスト：山口みどり（大東文化大学教授）

15:55～16:05 Break

16:05～16:45 総会

16:45～16:55 Break

16:55～17:55 講演 司会 閑田朋子（早稲田大学教授）
「〈共感〉から〈脱・共感〉へ——ヴィクトリア朝小説にみる都市労働者・貧民への眼差し」
田中孝信（大阪公立大学特任教授）

17:55～18:00 閉会の辞 日本ギヤスケル協会副会長 松本三枝子（愛知県立大学名誉教授）

*仮プログラムの時間は後日調整される可能性があることをご了承ください。

◆◆◆研究会予定◆◆◆

ギャスケル作品の読後感を自由に語り合い鑑賞する研究会です。今年度は以下の作品を取り上げる予定です。

2026年

7月	柏木いずみ	<i>Sylvia's Lovers</i> (1863)	Chs. 25-28
9月	村上幸太郎	<i>Sylvia's Lovers</i> (1863)	Chs. 29-32
11月	中越亜理紗	<i>Sylvia's Lovers</i> (1863)	Chs. 33-36

2027年

1月	江澤美月	<i>Sylvia's Lovers</i> (1863)	Chs. 37-40
3月	太田裕子	<i>Sylvia's Lovers</i> (1863)	Chs. 41-43
5月	大野龍浩	<i>Sylvia's Lovers</i> (1863)	Chs. 44-45

日 時：奇数月 第2 日曜日 午後2時～午後4時

※ 原則として Zoom による開催。日程等に変更がある場合は、日本ギャスケル協会 HP に掲載いたしますので、新着情報をお確かめ下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

◆◆◆日本ギャスケル協会創立40周年記念論文集◆◆◆

40周年記念論文集の執筆を希望される方は、お名前・ご所属・職位・仮題・概要をGoogleフォームにご入力ください。

締切：2026年5月末日

<https://forms.gle/RFaUbyapoq9ouHHSA>

【予定】

- ・募集開始：2026年4月
- ・募集締切：2026年5月末日
- ・執筆期間：2026年6月～2027年12月
- ・原稿締切：2027年12月31日
- ・査読終了：2028年1月末
- ・最終稿提出：2028年2月末

編集後記

桐山恵子先生から引き継ぎ、このたびニューズレター編集委員を務めることとなりました。原稿依頼の段階から最後までご相談に乗ってくださった閑田会長、巻頭言を快くお引き受けくださった松本副会長、ニューズレター後半の原稿の多くをお寄せいただいた早川前事務局長、そして遠藤事務局長には特にお世話になりました。また、原稿をお寄せくださった先生方におかれましては、皆さま迅速にご対応いただき、確実な原稿をご提出くださり、誠にありがとうございました。任期は始まったばかりですが、今後とも会員の皆さまにはお世話になります。どうぞよろしく願いいたします。（編集 瀧川宏樹）

発行： 日本ギャスケル協会
〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学
遠藤花子研究室
URL: <http://www.gaskell.jp/>
Email: h-endo@redcross.ac.jp
発行日： 2026 年 5 月 1 日